

アブない シスターズ

ABUNAI
SISTERS

小説 千夜詠

挿絵 神代竜

立ち読み版



第一章	秘める妹×2
第二章	キスする妹
第三章	嗅ぎ舐める妹
第四章	縛られる妹
第五章	跨る妹
第六章	絡みつく妹×2
第七章	愛する妹×2

登場人物紹介

Characters



ひゃっからん
百華蘭

聖北館学園高等部一年生。繚とは腹違いの百華家次女。頭脳明晰で大人しそうに見られるが、実際には腹黒い(?)性格の持ち主。

かみちえいじ
上地永治

高等部三年生。総志の親友にして悪友。成績は常に下から10位以内で不真面目だが、なぜか総志とウマがあう。



ひゃっかりょう
百華繚

聖北館学園高等部二年生。百華家の長女で、教師から一目置かれており、生徒たちからもカリスマ的な人気を集める現・生徒会長。

ひゃっかそうし
百華総志

繚、蘭とはそれぞれ腹違いの兄。高等部三年生で前・生徒会長。運動神経抜群&成績優秀だが、真面目すぎる性格が玉にキズ?

続けて欲しいと思ってしまう心を否定するように言った。

「だめ、にいさま、と、とつても臭いの……。だから、はあはあ、もつと綺麗にしなくちゃ、むちゅつ、ちゅつ、ぺちぺち……。つ」

ふにゆふにゆと肌を押す舌先が少しずつ下腹部に向けて流れていく。丹念に汗を唇で吸われていくのに、またすぐに噴出していく。とても熱い。心地よい熱に全身が包まれて、長いツインテールの毛先がまた別の刺激を与えてくれる。

（だめだ……。体が動かせないだけじゃない。舌が、き、気持ちよくなって、拒みきれない）

柔らかな唇に腹部が撫でられていく。ぬちゃぬちゃした舌先で舐め回されて、体が妹の唾液に塗れていった。興奮したような息遣いに肌が温められて、疼いていく男性自身。昨晚金髪の妹がしてくれたように、激しく扱きたてたくなってしまう。

「はあ、はあ、蘭……。も、もうこれぐらいで……」

その瞬間浮かんだ想いは、早く妹の行き過ぎた看病を止めさせて、一人きりになって自分の手で処理することだった。妹の行動で欲求を募らせてしまった事実は認めざるをえない。せめてそれを隠してしまいたかった。

「ま、まだまだ……。だって、にいさまの、一番臭くなってしまうとこ、これからの……。つ」

覆いかぶさる姿勢から、顔の位置を臍の上まで移動させていた蘭。彼女の切なそうな瞳が向かった先は、膨らみきった股間の部分だった。

「ら、蘭っ、まさか……」

ベッドの上で妹ナースは体勢を変えてくる。総志に背を向けるようにして、股間を広げながら膝を彼の腕の横につく。69と呼ばれる体位で、再び四つん這いになった蘭。

（うわっ、パ、パンツが丸見えっ！こ、こんな間近でえっ！しかも、蘭の顔が、僕の股間に……ち、近いっ！近づけすぎだ！）

柔らかそうなデルタに食い込むローライズショーツの皺もはつきり分かる。

「ふふっ、にいさまも、蘭の健康チェック、してみます？」

女の子の鼠蹊部に、どこかしつとりとしたショーツの薄生地から汗ばんだ猥褻な秘部の芳香が降りてくる。瞳に染み込んでくるような甘酸っぱさと、乳製品のようなほのかな臭いだ。つい鼻腔いっぱい吸い込んでいた。

「はあ、はあ……、にいさまのオ、オチンチン……」

「ら、蘭……やめて……」

情けない声を出す兄の下着のゴムに指先をかけてくる妹。美少女の繊細な指先が下腹部に潜り込んで、持ち上げながらズリ下げた。

「きゃっ……、す、凄……」

少し蘭の指先が震えている。総志は泣き出しそうな顔で瞳を閉じた。

耳年増な女の子であっても、予想以上の衝撃があったのだろうか、しばらく呆然と見詰めている。

「こ、これって、とっても大きいんですね、にいさま……」

下着の上から予測はついていたのだろうが、圧迫をなくして全貌を見せた男性自身は、反り返りいきり立って、肉茎に血管を浮き上がらせ、亀頭をパンパンに膨れ上がらせている。赤黒くカリ高く、先端の鈴口からねっとり淫水を滴らせて、ぴくっ、ぴくっ、と痙攣しているようだ。

「そんなの聞かれても……」

妹に肉棒の大きさや形状を自慢する兄など聞いたことがない。だが昨晚はこれをもう一人の妹に激しく擦られたのだ。そして今日、もう一人が眉根を寄せながら口角を上げ、唾液の溢れる口内を覗かせ、見詰め続けている。

「はあっ、嗅ぎたい……。にいさまのっ、性器……」

雄幹に鼻を近づけられて、またクンクンと鳴らされる。カーと体中が熱くなって、羞恥が込み上げてきた。でも嫌な気分がまったくしないのだ。しかもツイントールの妹は嬉しがっているように思えてしまう。そして見てしまった。

（嘘っ!? パンツの中心に……。し、染みが……）

丁度彼女のワレメにあたる位置から広がっていく濡れ染み。性行為の経験が少なく、そういう描写のあるメディアも殆ど見たことのない総志であっても、それが女性が性的に感じている証拠であることぐらいは知っていた。

（蘭が、あの大人しくて純情な蘭が、こんなことして、エッチな気分になっている？ そ

んな、馬鹿なっ！

その時、ぺちよっ、と舐められる感触に肉棒が震えた。

(ひゃっ！ な、何してんだ？)

僅かに顔を起こして感覚のほうを見やる。すると蘭は、相変わらずクンクンと鼻を鳴らしながら、その可憐な顔から舌を伸ばして上下に揺り動かしていた。昨日はお風呂にも入っていない薄汚れた肉棒を妹が舐めている。

「ら、蘭……、そ、そんなとこ、舐めたら、き……、う……っ」

たとえ自分自身の体の一部であっても、舌を触れさせることなど考えたくもない場所だ。しかも昨晚精液を放出し、微かではあったが、拭いきれずに乾きこびりついたものが残ったままだった。それに、純真可憐と疑わなかった美少女が何の躊躇いもないようにペロを押し当て、ねちよねちよと唾液を滴らせている。ゾクゾクと体が震えてきた。

「にいさまのっ、んっ、ぺちよっ、しよっばくて……美味い……」

やめろ、という言葉が出てこない。これは純粹な生殖行動としても問題であるが、妹相手としてはなおさら異常な行為なのだ。世間では当たり前前の愛撫として認識されている事実を知らない少年には普通でないと思えない。なのに、

(凄く興奮している？ 蘭に、妹に、こんなことされて……。それに、ふあ……あ、なんて、気持ちいい……っ)

そっと肉茎に添えられる柔らかな掌。その反対側に口付けて、ぷっくりした唇だけで甘

嘔みされる。そうかと思うと今度はそこから舌先が伸びてきて、カリ下をちよろちよろとつつくように刺激された。

「はむっ……ちゅっ！ にいさまのエッチなこの臭い……。蘭の唾の臭いが混ざって……、あふっ、あんっ、くっさいのおっ！」

とても嬉しそうな蘭。くねくねと横に揺らされる可愛らしいお尻を見詰めていると、ショーツの中心の染みはどんどん広がって、微かにワレメ筋が浮かび上がってくる。

ちゅぱっ、ぬちゅちゅっ、ぺちよ、ぺちやぺちや……っ！ 裏筋に沿って妹の舌先が蠢いていく。熱い吐息と唾液に湿らされ、肉棒の先端からねとねと漏れ出ていく雄の淫水。昨晚の激しく性感を刺激される感覚とは別種の、肉に染み込まされる快感に、強張りがピクンと跳ねるように疼いて、早くも欲求が募りだした。

「ら、蘭……、こんなこと、さ、されたら、僕……、はあ、はあ……」

パンパンに膨張しきった亀頭を指先で摩られると、うっ、と小さく唸ってしまった。

「にいさまのここ、とつても熱い……。呼吸も荒くなってる。はあ……あ、中のどろどろした熱いもの、搾り出して、んっはあっ、治してあげますからね」

両手で優しく巨棒の幹を掴まれて、斜めに角度を変えられる。潤みきった蘭の瞳が細められ、濡れた唇が開かれた。唾液溢れる口内を覗かせながら伸ばされる舌先。ふにゅっつと鈴口に押し当てられた。

「ふあっ！ 先っちよ……いつ、いい……」

漏れ滴る先走り汁を絡めるようにペロがのたうつ。排泄の筋に沿って上下する舌先の刺激がとても甘美で、為されるがまま乱れた呼吸を奏でてしまっていた。

「んっ、ちゅぷっ、ぱあっ、とろとろして、舌に纏わりついて……ぺちっ、ちよろちよろっ、おいひい……」

舌腹が回転するように亀頭全体を撫で回してくる。そうしながら徐々に唇が寄せられると、肉棒の太さに合わせて広げられ、

「はむっ……、ん……っ」

優しい圧迫と生暖かさに包まれた。

（僕のが、蘭の……く、口の中に！）

ぢゅぷっ、ぬちゆるっ、ちゅぱちゅぱ……っ。ギュッと根元を握り締められながら、蘭の舌腹の上を肉棒が擦れていく。カリ首まで収められても、ズズッとまだまだ沈められる可憐な顔。妹の体の中に自分が入り込んでいる。しっとり貼りつく愛らしい唇に、吸いついて窪んだ頬。悪戯っ子の瞳が色香を濃厚に漂わせて、あどけなさの残った切なげな顔に、男根が打ち込まれていった。

「や、やめ……っ、汚い……く……っ」

蘭の口内で舌ペロが強張りに絡みついてきた。過敏なエラの周囲をのたうつ感触に、粘膜で汚れが削がれていくのを感じていく。

「んぷっ、ぷはっ……らから、こうひて、んちゅ、ちゅぱっ、綺麗にひてるうっ」

少女の喉奥を亀頭が圧している。刺激してしまっているのか、どんどん蘭の唾液が溢れていって、口周りから涎となって漏れていた。肉棒を掴む彼女の指先も塗れさせるそれは、先走る淫水も混ざっているのだ。

(女の子の口の中、こ、こんなに……気持ちいいっ、なんて……うひっ！)

ぢゅっぽっ、ぢゅぽっ、ぢゅぽっ……。うっとりとした顔が上下しだす。ぷっくり柔らかな唇が幹を撫でて、舌がカリを舐め回すおしゃぶり。

「ら、蘭っ！ そんな、動かしたら……っ」

搾り出されるような手コキとは別の快感をすり込まれていく口愛撫。強く染み込んでくるような悦楽に放出を予感させられた。

(こんなこと、続けられたら、はあはあっ……ま、また……)

しかも今度は妹の口の中だ。それだけは絶対に避けたいのだが、体はまだ自由に動けない。とにかく今できることは、いざという時、括約筋に力を込めることだ。

(蘭は、こんなことしたら、うっ、くうっ、どうなるか、分かっているのか?)

夢中で濡れた唇を肉茎に這わせ続ける妹ナース。ローライズショーツの濡れ染みは濃くなって、ワレメ土手の肉色が見えるようになってきた。よほど恥毛が薄いのか、それらは殆ど確認できない縦スジ。甘酸っぱさが匂い立ってくる。

(こ、これが、蘭の……、だ、だめだ、見たら……はあ、はあ……)

視覚的な刺激が上乘せされ、興奮の度合いが上昇していく。じっくりと見てしまいたい

欲求を感じつつ、いけないことだと戒めようとする。でも、瞳を血走らせて、視線を逸らすことがどうしてもできないのだ。

「にはま……ちゅぱっ、ちゅっぷっ、ちゅっぽ、ちゅっぽ……ろお、いいれひよっ、蘭の、んっ、ばあっ、ちゅっ、ちゅっ、んちゅうっ、おくひっ……」

切なさが募りだす。彼女がこの行為を止めるまで、何としても耐えなくてはならない。

だが妹は兄をもっと刺激したくてたまらないようだ。

肉棒を握り締めていたのと反対の手で、そっと睾丸が包まれる。

「ちよ……っ！ どこ触って……」

うろたえる総志を無視して、転がすように弄ぶ蘭。兄を玩具にして妹は、嬉しそうに腰を跳ねさせた。

僅かに動くようになった少年の四肢がピクピクと痙攣を見せる。掻き回されるような急所の颯然れが、まるで精液の生産を活性化させるようだ。

「んふふっ、はぷっ、ぢゅぷっ、ちゅぱっ……、にはま、可愛ひっ……」

ショーツの内側に淫蜜が溜まりこんできて、スジ陰の部分が少し膨らんできた。

「はあ、はあ、はあ……んっ、んんんっ……」

興奮と物理的快感が強すぎて、だんだんどうでもよくなってきた。

（い、いやっ！ だめだ……。相手は、妹なんだぞ。妹の中に、あんなもの、吐き出したら……。うくっ、でもこれっ、よすぎるうっ！）

ぬつぶうつ、ぶぢゅぶぢゅつ！　ちゅぼつ、ぢゅぼぢゅぼつ！！

苛烈に動かされだす可憐な美少女の顔。根元を握り締めていた指先も上下させられ、いよいよ搾り出されそうになってしまふ。

「あむつ、ぷつぱあつ、にいはま、おいひいつ、おいひついいつ、んつ、ちゅぷつ、からふて、あふいつ、ンンつっ！」

掌で弄ばれる睾丸。ぺちやぺちやと舐め回される亀頭。唾液に塗れた唇のピストン運動で、肉棒は脈動を開始する。

（こ、この感覚は……くつ、はあはあ、昨日と同じ……）

前回放出してからまだ二十四時間も経っていない。なのに嬲られている睾丸から肉棒の付け根の奥にかけて、沸騰したものが込み上げて、きつく尿道の弁を圧してきた。今こそその時だと感じて、ぐつと括約筋に力を入れる。今のうちに説得するのだ。

「ら、蘭つ、も、もう……やめ……」

「ふうんつ、ンちゅうつ、ぺちやぺちや……らに？　にいはま……」

「だ、だから、こんなこと、もう、やめ……うつ、くううつ」

ベッドをギンギシと揺らすほど、蘭は激しく頭を揺り動かす。肉棒が快感の痺れに包まれてきた。限界を訴えだしたそんな兄の様子に、妹の瞳は輝き、彼の困惑を楽しむように強張りを含んだ口角を上げる。

「うんつ、やめ……らいよ……。ぢゅつぷつ、ちゅぼちゅぼつ、もつとひてあげひゃうつ」

「ち、違うって、はあはあつ、こ、こ、このままじゃ……ひつ、くあああつ！」
重点的にカリ首が濡れ唇で擦られ、鈴口が舌先で撫で回され、掌が激しく扱きたててきた。全身に力が入って体中からまた汗が吹き出てしまう。

「ふあつ、熱ひのへ、にいはまつ。ちゅぱちゅぱつつ、ひやく、抜いて、あげはきやつ！」
(違うううううつつ！)

ぶぢゅつ、ぢゅぶつぢゅつぶつつうつ！ 余計に苛烈になる唇ピストン。唾液に滑り擦られ、何度も連続的に震わされる男根のエラ。滑る口内や柔らかな舌、唇にあつて、微かに硬い歯の感触が絶妙に刺激してくる。可憐な末の妹に、恥ずかしくも汚らしい男性器を弄ばれている。吸いつく濡れた唇がきゅつときつく締められた。

強烈な刺激、強すぎる興奮、恍惚となつて、あるいはわざとか人の話を聞かない妹。もう、無理だ。この試練を乗り越えるには、自分はまだにも男だった。諦めたその瞬間、尿道奥の内側から大砲を打ち込まれたような衝撃があつた。

「も、もうダメっ！ 出るっ！ 出る出る出るううううっ！」

ピクツ、ビュクツ！ ドビュツツ、どびゆるびゆるっ！ ビュクビュクっ！

舐め回されている最中の肉棒の先端から、大量の精液を一気に放つた。総志は仰け反りながら腰を跳ねさせる。

「ンんつつ、むっぎゅん……うぐ……っ」

強張りを銜えこみながら咽び声を漏らす妹。彼女の口内で制御をなくして白濁の大砲を

何度も打ち込んでしまう。喉奥に絡みつく雄液は頬の内を満たして一気に膨れ上がらせた、一瞬見開かれた瞳はすぐに感動の潤みを増して細められる。ビクツと可愛らしいお尻が躍ったかと思うと、

「おくひに、臭ひの……、ひ、ひい……」

プルプルと全身を震わせるのだった。

びゅくん、びゅくんつ、と蘭の舌を叩く肉棒。その猥褻な強い脈動は、温かく包まれる余韻を感じながら収束していく。そして彼女の顔が彼の下腹部から離れた。

「んっ、ぷっひゃ……っ、にいさまの、へーえき……どろどろ、熱い……」

もう一度、うっ、と唸って喉の鳴る音がした。

頬を桜色に染めた恍惚顔が振り返る。

「男の人の精液って、こんな味がするんだ……。しょっぱくて、ちよつと苦くて、でも……にいさまのだから、美味しい……。飲んじゃった」

総志はぐつたりとして、だが気分はよくて、ただ、はあ、はあ、と呼吸を奏でながら呆然とツイントールの妹の顔を見ていた。魔性を感じさせる笑みがそこにあった。

（僕……出したんだ……妹の口の中に……）

発情した性器を思わせる充血して赤くなつた蘭の唇からは白濁した汁が微かに漏れ出ている。それを見詰めながら急速に意識は遠のいて、視界と思考は闇に包まれた。



（ああ、なんていやらしい僕の妹……。そんな目で見つめられたりしたら、僕は……）

——もういい加減、認めたらどうだ。本当は分かっていたはず。あのビデオが特殊な性欲を満足させる為のものであつて、決して青春ドラマなんかじゃないつて。論ずなんて大義名分をつけても、ただ単に自分の妹をあんな風に嬲りたかっただけだつて——

（ち、違うっ！ ぼ、僕は、本当に妹が可愛くて、それは兄として……）

——じゃあ、確かめてみる。繚のあそこを見ても、兄なら何とも思わないだろ——
 幾重にも鍵がかけられたような心の重い扉の隙間から覗ける真っ白な肢体。いつか見た夢のように求めて腕を伸ばしてしまふ。

「繚……。はあ、はあ……」

「お兄……様？」

ボールカゴの格子は充分に腕の通る広さだ。手を隙間に入れ、程よく脂肪のついた太股を撫でていた。

「あふつ、ゾクゾクして、ンっ、ハア……ア、腰がふわふわしちゃいますわアっ」

全身を震わせ、仰け反るように体をくねらせる美妹。しっとり吸いつく肌指先を立てて、擦るように這わせ鼠蹊部に近づけていく。

ブルマの縁に到達した。

「うはっ、はあはあっ……そ、そこ……っ」

ブルッと震える肉感的な肢体。大きく呼吸を乱して妹は感じている。

指先をそこに引っかけると、先端がより濃厚な湿度と熱さを覚えた。その先はさらに柔らかそうだった。少しずらずだけで妹の雌の全貌が確認できる。

血走った瞳から送る視線がそこだけに集中し、確かめる前に目眩を起こしそうに興奮してしまう。理性が欲望に追いやられ、だが相手が血の繋がった妹であるという意識だけがやけに強い。背徳感が余計に劣情を膨れ上がらせ、もはや心を偽れなくなってしまう。

見たい！ 見たい！ 見たいっ！！

震える指先で、グイッと湿気しけったブルマを横にずらした。

「はあああああつ、お兄様にいつ、見られちゃううっ！」

体育倉庫で露出される美妹の女陰。じめじめした粘膜の乳製品のようなきつい発情臭が熱気とともに昇り立つ。

「あつ……ああつ……っ」

驚愕に言葉を失った。全体がねつとりと淫蜜に濡れている。少し肉厚のピンクの花弁が裂け目から食み出し、ぐにやぐにやしたドスケベな形状を覗かせていた。ワレメ端から降下して伸びる肉芽は包皮を剥いて、真珠色が目の前で膨らみ突き出ていく。濡れた濃い金髪かみの恥毛が猥褻に貼りつき、溶かしたバターを零したように光沢があった。子供の頃見たのと違う。汚くて、綺麗で、臭くて、いい匂いで、どうしようもなくいやらしい。

煌びやかなだけでなく、上品な美しさを兼ね備えている自慢の妹の体の中に、こんな下劣で卑猥なものが潜んでいたその事実には平静ではいられなくなる。妹の雌を目の当たりに

して、感情が噴出してきてしまった。息遣いを荒げ、ビクビクと肉棒が脈動する。

少し泣きそうな顔をしながら、羞恥と悦びに感じ入った表情の繚。それが可愛くて可愛くてこらえられない。

全身から汗を滲ませて、女臭を湧きたたせる淫猥な肉体。他の男になんて、絶対に触らせたくない。

ブルマの下で淫蜜を蒸れさせていた淫乱な肉裂。強烈に雌を感じさせ、性的欲求が触発させられる。劣情を惹きつけられ、興奮のまま震える指先をゆっくりと近づけた。

「はあ、はあ、はあ……兄に内緒で、こ、こんな下品で卑猥なものをずっと隠し持っていたのか！」

ぬちゃっ！ 触れた瞬間から淫蜜が指先に纏わりつき、ねとつと掌から滴り落ちる。

「ひゃうん……っ！ ご、ごめんなさいっ、お、お兄様……」

濡れきった肉花弁のふにゆふにゆと優しく押し返してくる感触に、鼻息を荒げてしまう。いつまでも弄り回したくなるような悦感と妹の性器に悪戯している状況に意識できぬまま興奮は高められた。

ぐにゆう！ 中指を濡れそぼったワレメの内裂に潜り込ませてしまった。

「ヒっ！ ンっばあっ、指っ、くはア、お兄様の、指が……あ」

蕩けそうな柔らかさに、滑る熱い媚肉の感触。指先に吸いつき、絡んでくるようで、伝う触悦は、女の子の陰部がこれほどまでに気持ちいいものかと思いきや知らせてくれる。

ぐちゅつうつ、ぐちよぐちよつ、ふちゅつ、ぶちゅぶちゅつ……。指間に充血したような肉ピラを挟みこんで、中指で泥濘を掻き乱した。ぷちやつ、と淫蜜が僅かに飛沫を上げる。興奮しすぎて乱暴に扱ってしまい、唇を噛み締める学園の女王。

「僕にお仕置きされていて、はあ、はあ、オマ○コ濡らしちゃうなんて、悪い子……悪い子だ、繚はっ！」

「うヒツい……。は、はい……。りよ、繚は……。はあ、はあ、お兄様に責められて、ンっはあっ、気持ちよくなっちゃうっ……。変態ですわあっ！」

身じろぎする卑肉に、大きく揺らされる巨乳から汗が飛び散りだす。口角をぐつと下ろして眉を寄せる苦痛の中に、濃厚な悦びを滲ませる美妹の表情に嗜虐的な欲望が煽られた。掌全体が彼女の淫蜜にぬちゃぬちゃと塗れていく。雌汁は尻房やヒクつく肛門にも垂れ落ちていって、ブルマの縁にも染み入っていた。

「へ、変態……。そうか、ハア、ハア……。こ、この雌豚、繚は、雌豚だ」

成熟した女陰を見るのも初めて。ましてやこれまで触ったことなんてなかった。女の子の扱い方なんて、まったく分からない少年は、ただ強い興奮と想いのままに愛妹を捌ってしまう。

「ふあっ、はあはあっ、繚は、お、お兄様だけの、マゾ豚ですわあっ！ マゾ豚生徒会長なんですうっ。はあ、はあ、もっとおっ、もっど罵ってえええっ！」

ぶるっと巨乳を震わせ、肉壺を痙攣したようにヒクつかせて、繚は被虐悦の反応を露に

してくる。

ぬちゅっ！ ぐちゅぐちゅっ……っ！ 包み込むように女陰の感触を愉しみながら、淫蜜のたつぷり詰まった粘膜の奥を激しく指先で搔き回した。過敏な肉芽を何度も圧して、弄ぶまま転がしていた。

「んっ、ハイっつ、ク、クリちゃんっ！ だめだめ、お兄様っ、よ、弱いのっ、そ、そこっ、ハイい——っ、ジンジンきちゃうううっ！」

ガシヤガシヤとボールカゴに背を叩きつけるように仰け反るマゾ妹。淫乱な反応に、眉を顰める喘ぎの表情がどうしようもなく愛しく見えてしまう。同時に肉棒の疼きが頂点に達してくる。

——セックスしたい——だが相手は妹だ。ここまでなら悪戯で済む。だがもし繋がってしまつたら、それはもはや完全な罪だ。

（圧迫されて、痛い……。はあ、はあ、ズボンから、だ、出すだけなら……）

興奮してしまつて震える指で、ベルトを緩め、ファスナーを下ろす。窮屈感は薄らいだが、まだ気持ちよくない。肉棒の先端から漏れ続けていた先走りの淫水が下着に染みを作っていた。邪魔で仕方がない。

マゾ雌を齧る指先を一旦離して、両手でズリ下ろした。

「ああっ……、妹に、そんなもの、ど、どうなさるの、お兄様……。学園内で、ハあ、ハあ……私、生徒会長ですよ」

天を突くように硬直しきってそそり立つ兄の肉棒を見て、潤んだ瞳を細める妹。言葉とは裏腹に、強く求めているかのようにその目尻が下がっている。

鎮めるように繚の淫蜜に濡れきった掌で強張りを握り締めた。

眼下に息づく剥き出しの発情しきった女陰。指先ですでに味わった柔らかい感触に、滑る気持ちよさ、そして温かさ。涎を垂らすように雌汁を滴らせ、強烈に誘ってくる。

(い、入れるだけなら……、射精しなきゃいいんだ)

両膝を開いて、腰の位置を下ろしていく。肉棒の先端の角度を変えて、パンパンに膨らみきった亀頭が妹の股間の熱気と湿度を感じていった。

「ふあっ、はあ、はあ……、お兄様が、き、きますわ……」

微かな怯えと緊張、それに期待を膨らませるような顔が見える。興奮しきったように乱れた呼吸音を奏でる雌妹の閉じきれない唇に唾液の糸が幾つも伸びた。

「ごめん、繚……」

腰周りから急速に肉付いた臀部の横を片手で押さえ、男根の先端をぐっしより濡れた肉ビラの重なる場所に接触させた。

(繚の……オマ○コ……)

ぢゅぶっ！ 亀頭が花弁を押し開き、強張りに淫蜜が漏れ伝う。

「くあっ、はああっ……はい、入って……くるううう」

柔らかいぬちゃぬちゃした感触に局部が包まれてきた。その様子をとろんと臉を半分下

ろした瞳で見詰める繚。ぐつと腰を前に進めると、さらに瞳を細めて眉根が寄った。

濡れた生暖かい肉ピラに亀頭が吸着されて舐め回されてしまう。なんという快感か。まだ雌肉の深淵に送り込む前から、だらしなく口元が緩んで、肉棒の先から脳天まで体の芯がジンと痺れてくるようなのだ。

小さな窪みの中はみっちりと確かな抵抗がある。それはヒクつき、肉棒をしゃぶりがついているようだった。己の欲求のままに彼女の腰を引きつけ、グツと侵攻する力を込めた。「んっ、ばあっ、す、凄いいっ！ お、お兄様の、オチっ、おチンポっ……、おつきくて……熱い……」

又ズツ！ ぢゅぶぢゅぶっ！ ぬっぷうっ！ 抉りこませて、肉棒が膣内の温もりを感じていく。すぐさまぬちゃぬちゃと強張りが濡れた粘膜に舐められた。

吸いついてくるような粘膜で、内側のヒダヒダが肉茎に纏わりついてくる。熱くとろとろに蕩けた壺の中で、じんじん痺れた肉棒が溶けていくような感覚。本当に一つになったのだと感じさせられた。

僅かに冷静な自分が残っていると思う。

（やってしまった……。繚の……血の繋がった自分の妹の膣に、入れてしまった……。）
「あふっ、うんっ……。お兄様が、わ、私の中で、はあっ、ピクピクしてますわあっ」

欲望と衝動がそれを背徳の刺激に変えてしまう。

「繚のオマ○コ、ぬちゃぬちゃして、温かくて、いいよ、繚……。僕、もうっ……」

動かさずにはいられない。

ぬっぷっ！ 又ズズッ、ぬっぶ、ぬっぷっ！

「あむっ、んっ、ひっ、ひっ……、お、お兄様っ、はあんっ、あんっ、繚、初めてですのっ、だ、だから、そんな……」

突きこむともっと強烈な快感が湧き起こり、もつと味わってしまいたくなる。

愉悦と苦痛の狭間を行き来するような妹の表情が見えた。肉棒の太さそのままに膣孔を広げられ、深く肉壺の奥まで初めて固体を受け入れている。

「はあ、はあっ、お、お仕置きなんだからっ、我慢して、繚っ！」

可愛い妹。誰よりも愛していると自負できる。優しくもしてあげたい。なのに体中から汗を滴らせ、喘ぐ彼女の姿を見ていると、どうしても嗜虐的な気分になってしまうのだ。

ぐぢゅっ！ ぬっぷっ、ぬっぶ、ぬっぷうっ！ ズチユズチユズチユツツ！！

「ヒっ、いっっ！ あはっ、ひゃっ……あっ、そ、削がれますわあっ！ お兄様の、ひっ、ひいっ、ひっ、おチンポっ、オマ○コっぐちやぐちやにされ……くうう……っ！」

巨棒はポールカゴの格子が邪魔で根元まで入りきらない。それでも初物を十二分に埋めつくしていた。重い衝撃に、たぶんっ、たぶんっ、と柔らかな巨乳を揺らして身悶える淫妹。苦しうに麗顔を歪める中に、愉悦を濃厚に滲ませていた。

「ああっ、繚っ、美味しいよ。繚のオマ○コっ、とっても、美味しいよ」

格子を掴んで、滑車のついたポールカゴを前後に揺り動かした。

「ソっ、はあっ、はあっ、はああ——っ、激しくて、熱いので、ひいんっ、お仕置きされてますううっ！」

ぬぢゅっ！ ぢゅっぶっ、ぢゅっぶっ……。結合部から漏れ出る愛液が増してくる。ブルマに広がっていく濡れた染み。雌汁は真っ白な尻房のほうへとたらたら滴り、ポールカゴの下へと落ちていった。いつも凜と強気な彼女が、詰め込まれる快感に瞳に涙を滲ませ歓喜に泣いているように見える。

（はあ、はあ……。ああ、僕の可愛くて、ドスケベな線が、まるで……）

身動きできぬまま兄に肉棒を突きこまれていた妹。彼の劣情の為だけに女陰をぐしよぐしよにして卑壺を使わせる肉玩具だ。

「んっハアっ、ハアっ……。いっ……。いっ！ も、もっど……」

彼女の表情から苦痛が消える。だらしなく開いた唇から涎を滴らせ、甘ったるく吐息を漏らしていた。虚ろなようで、快楽に酔いきったような瞳。腔で感じる深い性悦に、妹も夢中になっている。

（そうだ、線……。君は昔は……。昔から、僕のいうこと、やることに、素直だった。だから、時々、はあはあ、意地悪を言いたくなる。くっ、ふうっ）

すぐにでも放ちたくなる欲求を耐えた。中に出してしまう罪だけは絶対に犯してはならないと、霞む理性で言い聞かせる。

「恥ずかしい格好に拘束されて、そのうえ、あ、兄のチンポに犯されて感じてしまうなん

て、んっ、ふあ、はあ、繚は本当にドスケベな淫乱雌豚だね」

「あはあっんっ、酷いっ……はあ、はあ、お兄様の、そ、その意地悪な目っ、ひゃっ、あ
んっ、あんっ、す、素敵ですわっ、あっ、あふんっ！」

ぬっぶうっ！ ぬっぶっぬっぶっぬっぶっ！ 両足首を鉢巻で繋がれた状態のまま、自
らも腰をくねらせ始める繚。白い体操服が汗に濡れて素肌が透けてくる。

「くっ、りよ、繚……っ、そんなにしたら……」

くちやくちやしたワレメから淫蜜が迸る。肉茎を壺口に減り込ませ、捲り上げさせ、そ
れを果敢に何度も繰り返した。亀頭が濡れきった粘膜をぐしゃぐしゃに掻き乱し、でも同
時にしゃぶられているような感覚。腰を前後に振るごとに、快感が上積みされていく。

「アっはあああっっ、お兄様あああっ！ も、もっとおっ、ズボズボっ……あんっ、あ
んっ、んっ、はあ、はあ……おチンポっ、穿って、突いてっえっ！」

初めての女壺から与えられる射精への誘いに我を忘れそうになっってしまう。

体育倉庫の中に響き渡る淫らな喘ぎ声と、濡れた粘膜の擦られる音。淫乱な雌と秘め事
の猥褻な臭いが充滿して、それだけで獣に変貌させられる。

「ああ、繚っ、繚っ、繚うううっ！ 気持ちいいよ、はあはあ、くあっ……」

ぐぢゅっ、ヌズズッ、ズボズボズボオッ！

「んっヒッ！ あんっ……はあっ、はあっ、は、激しいっ、ですのおっ！ あはああ——
っ、な、なんか来ちゃいますわあっ！ オマ○コっ……いつ、いつ、くっ、はひっ、

いいっ、きちやうっ、きちやう、きちやうううっ！」

背を弓なりに反らす美妹。振り乱した金髪から汗を飛び散らせ、みっともなく晒されるアへ顔すらとても美しく見えた。肉棒の先端が奥に吸い込まれるような感覚が沸いて、濡れきった膣内も沸点を超えていく。

ぬぶぬぶぶっ、ぢゅぶっ、ぢゅっぶ！ ずぶぶっ！

「どうしようっ、止められない。うっ、ううっ……」

もう限界だと分かっていた。強烈な鉄砲水のような勢いが肉棒の付け根の奥に襲ってきている。それなのに、もう少し、もう少しだけ、と続けてしまう。

「あはあんっ、こ、込み上げて……きちや……っ！ イっ……イキっ、そう……、あんっ、あんっ、イっ、イクっ……う、ハっ、ハっ、あ……、ら、らめええっ！」

妹の悦び張り上げる甲高い声に、理性は完全に吹き飛んでいく。

もはや完全にただの獣と化して、限界まで速く激しく腰を前後に振り動かしした。

括約筋が痺れる。心の中で微かに駄目だと叫んでいる。だが性の本能に抗いようがない。「イクううっ……淫乱妹の子宮にお兄様の熱いザーメンでお仕置きしてえっ！」

きゅるうっ！ 急速に雌粘膜が収縮して、強烈な締めつけと共に亀頭が吸われたその時、「うっ、うわああああああっ！」

ドピュルルッ！ ドドブッ！ どびゅんっ、どくどくっ！

ペニスが跳ね上がるほどの脈動を繰り返し、大量に注ぎ込んだその瞬間、悶絶したよう



指の関節が二つ入り込んだ。それが直腸の中を掻き^{むし}搔るように鬩^むつてきて、直接的な刺激と被虐感を煽られる。

(や、やですわ……。この子、意外と……。上手い……。パイプよりも細くて、小さいのに……。ヒっ、うんっ……。蘭の指のほうが、き、気持ちいい……。だ、だめ、お兄様が見えますわ。その前で……)

離れた場所から総志の視線を熱く感じる。自分と妹の様子を瞬きすら忘れたように見詰めてくる彼を意識しただけで、愛撫されているような性感が湧いてしまうのだ。

涼しげな風がそよいでくる中、繚の全身が発汗してくる。

「むはあっ、はあんっ、い、痛くれ、そ、そう見へるらけ、れすわ……。ハっ、あんっ」

兄との結合を夢見て、全身を磨いてきた繚。真面目な彼は、ひよつとしたらセックスを最後まで拒むかもしれない。でもお尻の孔ならば、肉棒で穿り返してくれるかもしれない。それがアナルを積極的に開発した発端だ。それが今、仇となっている。

「無駄な頑張り……。時間の、はあ、はあ、問題なんですから……。あは、はは……。さあ、にいさまの見ている前で、みつともなくイっちゃってください」

興奮して狂気を見せ始める蘭の指先が、直腸から膣道を叩いてくる。それがGスポットを刺激して、濡れきった肉ピラを充血させてきた。繚は拳をぎゅつと握り締める。溢れる淫蜜がだらだらと流れて太股を舐めていくのが分かった。

(う、嘘……。っ、こ、このままじゃ、ヒっ、ひいいっ！ ま、まずいですわっ。ふあっ、

はあああああつ、お汁っ、噴出しちゃうううっ！

腰が勝手にくねりだす。仰け反るように赤らんだ顔を上げて、瞳に涙を滲ませた。

「ひぎっ、いいっ！ お兄様っ、見ないでえっ！」

汗ばんだ全身を震わせて、ぷるんぷるんと巨乳を大きく揺らしてしまふ。

そんな淫猥な姿を見詰めてくる妹の瞳に何故か強い愛情を覚えていた。

「はあ、はあ……す、素敵っ、ねえさまっ、こ、こんなに感じてる」

蘭も興奮しているのだと気づいた。ただ意地悪なだけじゃなくて、確実に感じるように攻めてきてくれている。

「いいっ、ねえさまっ、さあ、お願い、蘭の指で、イッて欲しいの。蘭のマゾ雌になつてえ、ねえさまっ！」

それでも、違うっ、と否定するように首を何度も振った。姉の威厳と、兄をかけての勝負に絶対に負けられないその意地だけで、肛悦を抑え込んでいる。

だが兄の血走ったような瞳がこちらを見ていることに気づいてしまうと、いやらしい反応を見せている羞恥に、一気に昇り詰めていきそうになった。

「ひやあああつ、らめらめえっ！ ンっ……くヒっ、ヒイっ……、イっ……イキ……っ」
諦めて快感に身を投じようとしたその時、

「緯！ 蘭！」

兄の必死な声が中庭に響いてきた。

中庭の芝生はひんやりとして気持ちよかった。そこに仰向けに寝ると満天の星空が輝いている。両手の自由はすでに取り戻していたが、全裸は相変わらずだった。

「さあ、繚……おいで……」

「はい……お兄様……」

グイッと彼女の首輪を引いてあげる。四つん這いで近づく金髪の妹は、ゆさゆさと巨乳を揺らしながら、高揚した顔つきで、全身から濃厚な甘ったるい汗と雌肌の芳香を匂わせていた。

「んふっ、にいさまのオチンチンから、こんなにあんなにエッチなお露が漏れている。そんなに我慢できなかつたんですか？ 私がねえさまを攻め立てる姿を見て……」

大きな黒い瞳を細めながら、蘭が覗きこんでくる。総志は少しだけ笑って答えた。

実際のところ、二人の妹のどちらの姿で興奮しきってしまったかなんて分からなかった。どちらかなんて選べない。優柔不断と一言で片づけられないのは、繚も蘭も愛する妹であることに変わりはないからだ。

肉棒が疼ききって、確かに我慢もできなくなったが、見せつけられている間に、なんとかこの場を上手く収める方法を考えていた。その結論は、二人の性癖を同時に満足させるしかない、というものだ。

「自分から、お尻を沈めさせようなんて、お兄様って、やっぱり、ご主人様ですわ」

「はあ、はあ、顔面騎乗だなんて、にいさまは、本当に変態のマゾなんですから」

二人の思い込みに対して、もう否定のコメントなど無意味だろう。

（はあ、結局は二人とも、僕を自分の理想にしたいんだろうな……。ま、まあ、嫌な気分ではないけど……）

愛と性に貪欲な状態を示すように、どろどろにこなれた陰部から愛液の臭いを放って足元から近寄ってくる繚。繚は、べつとり濡らした愛らしい縦スジを見せつけるように兄の顔の横に両足を置いた。二人、向き合う体勢だ。

こちら側を向きながら大きく股間をM字に広げて、奴隷妹は腰位置に跨ってくる。柔らかな脂肪が程よく乗った全身がほんのりと朱色を帯びて、口を開けた卑肉からねつとりと淫蜜が滴り落ちてきた。たふんと肉付いたお尻が丁度強張りの上に来て、彼女は腕を伸ばして男性自身を掌に包む。

「あはあつ、こんなに熱くなって、求めてくれてますわ」

垂直に立てられる肉棒は焦がすような視線に晒され、ぷるつと震える双尻の間に導かれていった。

（繚の……妹のお尻の孔……）

末っ子の指先で穿られて肛皺が捲れ上がって口を開いている。亀頭の先端が接触して、

「んっ……っ！ おっきい……」

生々しい温かさを感じたその直後だった。

ヌブッ！　ヌブヌブッ……ッ！　肛孔を減り込ませてしつとりと蒸れたようなお尻が沈みこんできた。

初めて感じる雌アナル。疼ききっていた肉棒に燃え上がるような腸内の熱が伝い来る。収縮が強く、ヌメヌメと柔らかくて、肉棒のどこもかしこもが粘膜に接触されているのだ。本当に溶け合つて一体となるような感触で、肛悦が染み込まされた。

弄くり回されて腸液が絞り出されている。さらに猥褻に発達したワレメからだらだらと漏れ伝つた淫蜜も混ざつて、思いのほかよく滑つて受け入れてくれた。

「き、効くっ！　ハ……ああっ……、お尻、満たされて……ひ、ひびれますわあ……っ」
金髪の妹が見せた刹那の痛みの表情が、蕩けるように緩んでくる。全身を震わせて、じわじわと体中を包んでくる快感に酔っているようだった。

「ら、蘭も気持ちよくしてくれなきゃ駄目なんですからっ！」

仰向けの顔が黒髪の妹の丸くて可愛いお尻と縦スジで覆われる。甘酸っぱく粘膜を香らせる股間は太股に到達するほど一帯を淫蜜に塗れさせていた。窓から漏れてくる光にキラキラ光るスベスベした肉裂。

もっと見詰めていたい気持ちを見捨てられて、遠慮なしに彼女の体重が顔面に乗せられてくる。目の前が少し汗ばんだ尻肉でいっぱいになり、鼻と口元が妹の股間で覆われた。微かな息苦しさにカリ首の膨張が増してしまう。

「うぐっ……っ！」

低く唸って顎を僅かに上げた瞬間、鼻先が滑る肉裂の間に潜り込んでいた。

ぬちゃっ、ふちゅふちゅ……っ！ 敷いた顔から思わぬ反撃を受けてしまった小柄なミストレスは、ビクッとその身を震わせる。

「あんっ！ に、にいさまっ、勝手に動いたら、あ、あとでお仕置きなんですからっ！」
腰を微かにズラした蘭のお尻の中心は丁度口元に押し当てられる形となった。甘酸っぱい粘膜を感じて舌を伸ばす。皺の連なつた排泄部がすぐそこにあつた。

（こ、これ、蘭のお尻の孔……。可愛い、窪み……）

柔らかく押し返してくる肛皺がより濃く味わわせてくれる。

「あはんっ、にいさまつたら、そんなに蘭に奉仕したいんですか。ほらほら、もつと綺麗にさせてあげる」

汚いなんて思わなかったが、不浄の場所を唇で清めさせられているような感覚に感じ入つてしまいそうになる。そのヒクつきが、せがまれているようで、甘えられているようで、嬉しくなっていた。

顎で割り開いてしまった卑唇から、ねちよねちよと淫蜜が垂れてきた。顔を妹の発情液に塗れさせられる興奮に、手綱を引くように繚の首へと繋がつた鎖をたぐり寄せてしまう。すると彼女はそれを合図と受け取つたか、肉棒に杭打たれたお尻を上下に振り始めた。

ずぷっ！ ぬっぶ、ぬっぶっ……。巨棒の幹にだらだら滝のように流れ伝っていく。雌汁を巻き込むようにしながら、柔らかな腸粘膜にしゃぶられていく。

「お、お尻っ！　い、いい……っ。はあ、アナルご奉仕っ、んっ、ハあっ、ふ、深くっ、きちゃいますわあっ！」

姉の腰の動きに呼応するように、末っ子もお尻を前後に滑らせだす。

「や、やだ、ねえさまったら、涎なんか垂らして……。あふっ、ハっ、ハっ、に、にいさまの顔っ、気持ち……。いい……。っ」

雌自身の粘膜にぬちゃぬちゃと鼻筋が舐められる。ぷっくり膨らんだ肉芽にも刺激を欲してか、ツンテールの美少女は股間をぐりぐりときつく押しつけてきた。

「ひゃあんっ、クリちゃんっ、もう少しい……。っ」

妹に対抗するように献身的に繚も腰の動きを大胆にしてくる。

「蘭だっ……。なんて、下品に……。はっ、はっ……。唾を飛ばして……」

ぬぶっぬぶっう！　たわわに揺れる奉仕雌の尻肉がパンパンと兄の骨盤を叩きだした。

上半身は奉仕しながら、下半身では同時に奉仕されている二極の快感に肉棒は際限なく淫水を漏らし続けている。

「げ、下品なのは……。んっ、はあっ……。ねえさまの、おっぱいじゃない、ですか……。汗を飛び散らせて、ふあっ、あっ、あんっ……。はあ、はあ、熱い……。いやらしく、ぶるんぶるんっ……。っ」

蘭の太股を掴むと、彼女もまた全身に汗を掻いているのだと分かった。ぬぢゅっ、ぬぢゅぬぢゅ……。っ。お漏らししたように蜜液の量が増して、鼻腔と口に入り込んでくる。

「ぶはっ！」

微かに咽せて、身悶えるように顔を震わせてしまう。すると、
「ハっ、ひゃんっ……に、にいさまっ、そ、それっ、いつ、いい……っ」

顔面騎乗のまま黒髪 of 妹は大きく股間を開いて、膝を芝生につける体勢を取った。彼女
の上半身が前に傾く。

「やんっ！ ら、蘭の顔が……っ」

肉棒を覆う線の臀部がビクツと震えた。

「あふんっ、ねえさまの、おっぱいっ……。ハあっ、ハあっ、顔っ、挟まれちゃう。んっ、
ううんっ、柔らかくて、はああ、き、気持ちいい……」

「ちよっ、い、今、そんなっ、む、胸まで攻められたらっ、だ、ダメっ、ですわあっ！」
可憐な妹の顔を巨乳に受け止めてしまった姉は、仰け反るようにしてお尻を悶え狂わせ
る。肉棒が果敢に腸粘膜を削いでしまい、ぬちゃぬちゃした奥ヒダにカリ首が何度も震わ
され、強烈に射精を要求されてしまう。

小柄な妹のワレメで鼻と口元を塞がれる息苦しさも心地いい。本能のままに女体を感じ
つくしたくなって、舌を伸ばして肉裂の奥へと潜り込ませてしまう。

「あっ、あん……っ、にいさまっ、か、勝手に……ダメなんですからっ！」

それでも嬉しそうに激しく腰を前後に振って、股間を甘えさせてくる末っ子。

「ヒツ……っ！ 乳首っ！ ら、蘭っ、摘んじゃっ、ダメれすわああっ！」

ぐちよぐちよになったアナルが強張りを締めつけ、腸壁がしつとりと吸いついてくる。
(ふ、二人とも……激しすぎるよ。気持ちいいのがっ、ああっ、膨れてくるうっ！)

快楽に夢中になった妹たちのいやらしい汗と秘粘膜の香が濃厚に降りてきた。

ぬちゅっ、ぐちゅぐちゅっ！ ぬつぶっ、ぬぶぬぶぬぶっ！ 顔面と腰の上で、濡れた女尻が前後に上下にグラインドし続ける。淫蜜に顔中ベタベタになって、だからだと漏らされる雌汁が下腹部に溜まりこんだ。

もう充分涼しい季節の屋外なのに、体が快熱に包まれていた。

「はあ、はあ、はあ、繚、蘭……んっ、んぐっ」

ぺちよぺちよと突き伸びたクリトリスを舌先で転がし舐めて味わいつくす。

「あひゃっ、ひゃあんっ、らめらったらっ！ にいさまっ、お仕置きっ、なんれすからあ
あああっ！」

叫ぶ言葉と無関係に、兄の顔を股間に感じまくる蘭。憧れた姉の巨乳を夢中で挿んで、その乳首を弄くり回していく。

皺を限界まで広げたアナル孔に下から腰を叩き込んでしまう。

「も、もうっ！ 何も考えられまへんわあっ！ い……イキっ……イキそうれすのおっ！
おひりでっ、イクっ……う。蘭もっ、乳首っ、もっとおおおっ！」

腸内の性感帯を刺激され、粘膜壁越しに巨棒でヴァギナも圧迫されている繚。妹の無邪気な乳首責めにも理性が完全に掻き消されているようだ。

二人のアへ顔が見られないのが残念で仕方がない。だが強く感じる愛情が強烈な性欲と
なつて、ただ突き動かされる衝動のままに顔と腰を振りまくつた。

(ああ、繚つ、蘭つ、ふ、二人とも、大好きだ。愛してる！ くつ、うわああつ！)

想いを込めて、ツインテールの妹のクリトリスを唇で摘んだ。強く、強く、吸いついて、
溺愛する心のままに微かに歯を立て、甘く噛む。

「ヒいつ、ひやつつ！ ひゃああつ——っ！ らめらめつ！ 来ちゃうつ……ひつ、あ、
ああ……だめええええええええつ！」

言葉と裏腹に兄の唇で肉芽を摘まれたまま、さらに激しくワレメを前後させる蘭。感じ
てくれる悦びはそのまま強い快感になった。

もはや理性をなくしたように淫乱にお尻を躍らせる繚。滑りに溢れた熱い腸内が濃厚に
肉棒を舐め回してくる。

兄は、快樂一色に染め上げられる脳内に、一気に湧き上がってくる放出の欲求を感じな
がら、三人一緒に果てることを強く望んだ。

ぢゅぶつぢゅぶつ！ ぬぶぬぶつ！ 強烈に強張りが締めつけられた。

「あああああんつ！ おひりがもう壊れちゃうううううつ！ ぐひやぐひやになつれえつ、
イグうううううつ、イグつ、イグつ、いつ、イイツ——っ!!」

ぶつちゅつ、ぐちゅぐちゅぐちゅつ！ ほぼ同時にきつく肉芽を吸い込むと、
「クリちゃんつ！ イつ……イイツ！ ふああつ、ああああああ——あつ！」

プシャアアア——ッ！ 顔の前で飛沫が上げられた。

そして、

（うぐっ、うあああああつ、で、出るっ！ 出る出る出る出るううううっ！）

脳天が快感に痺れさせられ、一瞬全てが真っ白に包まれる。

びゅぐっ！ どびゆるるるっつ、どぶどぶっつ！ マグマのような熱い白濁を噴出させながら、滑りきった腸内で肉棒が跳ね上がった。

「イツ……イキますわあつ！ つハ……あつ、ああつ、はあ……あ、おにいひやまのっ、精液お浣腸おおお……、いいっ、いじいいいいっ、マゾ豚っ、おひりで、イキまふううう！」
プシュッ！ プシュウウウ——ッ！ 仰け反りながら繚は兄と妹の腹に潮を吹き散らす。
愛しい二人を愛液でベトベトにさせて、全身を蕩けさせながら、断続的に卑肉を痙攣させる金髪の妹。

お漏らしした黒髪の妹は、疲れきったように全身を姉に預けてその汗塗れの巨乳に幸せそうに顔を埋めていた。

「はあ、はあ、はあ……にいさまも、ねえさまも……変態……なんですから……」

心地よい虚脱感を感じながら、肉棒はまだ妹のアナルに突き刺さったままだ。

もう少しだけ、このままでいたい。

あとのことなど何も考えられず、びゅくん、びゅくんと震える余韻に浸りながら、ただ熱くなりすぎた体を冷たい風が過ぎていく感覚だけがあった。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 690円(税込)



全国書店で
好評発売中

凄腕退魔士の咲妃を
牝奴隷に堕とす
新たな敵の登場!

「小説・蒼井村正 / 挿絵・或正せねか」

呪詛喰らい師2



全国書店で
好評発売中

少女天使の暴走が
平和な学園生活を破壊する!!
シリーズ急展開のバトル&エッチ!!

「小説・さかさ傘 / 挿絵・天海雪乃」

思春期なアダム4 聖域の崩壊



「小説・大熊狸喜 / 挿絵・大空樹」

オトミッコ! 僕は男の巫女娘

全国書店で
好評発売中

男の子と女の子——
二つの性の中で揺れ動く
男の娘が巻き起こす学園ラブコメディ!!



既刊LINEUP

- 仙狐字態戦姫ノブナガリ ①～③
- ビルグリムメイトン ①～③
- 不死の吸血鬼がTSのご主人様を募集しているよです

全国書店で好評発売中

- 思春期なアダム ①～④
- 呪詛喰らい師【カースイーター】
- 女幹部メル様のカセイ征服計画!
- 借金お嬢小姐 ①～④
- 無敵の姫騎士がDMMに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園ブラックキャット

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
来かねる場合がございます。お問い合わせはメールでもお手数ですが再度お問い合わせください。
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

VALKYRIE



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!